

## 序 文

白鳥庄之助先生は、平成13年3月末をもって本学を退職され、ご退任後ただちに経済学部教授会の総意により、成城大学名誉教授に推挙された。先生は、昭和42年4月に本学経済学部にて専任講師として着任され、それ以降、助教授、教授として研究と教育に尽瘁された期間は、通算34年に及ぶ。

本学経済学部教授会は、先生の多年にわたる大きな学恩とご功績に深い感謝の意を表したいと考え、経済学会誌『成城大学経済研究』第162号を特別号として『白鳥庄之助名誉教授退任記念号』を編集することを決定した。先生は明年（平成16年）7月に古稀を迎えられるから、この記念論文集には、これを慶賀申し上げたいという思いも込められている。

このような企画に対して、かつて先生の親身の指導を受けられた松崎信先生と内藤高雄先生は快く賛同され、力のこもったご論攷をお寄せくださった。われわれの深く喜びとするところである。また、信岡資生・山田高生両名誉教授、花枝英樹元教授をはじめ、本学経済学部の多くの方々が、研究成果の形で、かつての同僚としての祝意を表された。そして、白鳥先生には、ご経歴とご業績のとりまとめについてご協力いただいたばかりでなく、長年の研究成果を踏まえた連結財務諸表の総括にかかわる玉稿をたまわることができた。

こうして多くの方々のご協力を得て、ここに浩瀚な記念論文集をめ度たく上梓する運びとなったのは、ひとえに先生の篤実なお人柄の賜物である。そして先生に捧げるのに恥ずかしくないものとなりえたことは、斎藤昭雄教授をはじめとする編集委員会の諸教授のご尽力によるものにほかならない。

## 序 文

白鳥先生は、昭和9年7月23日千葉県印旛郡八街町（現八街市）でお生まれになり、千葉県立佐倉第一高等学校を経て、昭和33年3月一橋大学社会学部をご卒業、1年間公認会計士事務所に籍をおかれてのち、一橋大学大学院商学研究科へ進まれ、会計学及び経営学専攻修士課程を経て、昭和40年3月同専攻博士課程を単位取得退学された。この間、大学院時代には片野一郎教授のゼミナールで研鑽を積まれ、昭和38年4月から2年間千葉商科大学における非常勤講師としての勤務を経て、昭和40年4月に同大学専任講師に就任された。そして、昭和42年4月に本学経済学部、簿記および会計監査論担当の専任講師として迎えられ、翌43年に助教授、49年に教授に昇任され、財務会計論・税務会計論を担当された。さらに昭和50年には本学大学院経済学研究科経営学専攻の修士課程、56年以降は同博士課程後期担当となられ、本学における会計学の研究教育活動の進展に大きく貢献された。

先生のご研究の主題は、一貫して連結会計ないし企業集団会計を日本に根づかせることに向けられてきた。その背景には、昭和30年代後半以降に問題化した粉飾決算と大型倒産の事例にみられるように、欧米諸国に対比してわが国では企業集団会計制度がなお未成熟だったという重い現実が存在したわけであるが、先生は、早くも昭和39年に、アメリカにおける代表的会計学者で連結財務諸表の本質を理論的に開拓したモーリス・ムーニッツ教授の名著を、『ムーニッツ連結財務諸表論』（同文館）として片野教授監修のもとに翻訳出版され、学界へ顕著に寄与すると同時に、若くしてこの分野での気鋭の研究者として学問的地歩を築かれた。そして昭和47年7月から9ヶ月間、カリフォルニア大学バークレー校に客員研究員として滞在され、アメリカ会計学会、アメリカ公認会計士協会、カリフォルニア州公認会計士協会などで要職を歴任しつつ会計原則の確立に邁進していたムーニッツ教授と、直に親交を深められるに至ったのである。

その後、連結会計をめぐる先生のご研究はさらに発展をとげ、外貨換算

## 序 文

問題（本国主義と現地主義）、時価会計、各種ヘッジ商品の会計、各国会計基準の多様性と国際会計基準など、さまざまな派生的な諸課題にも、きわめて精力的に取り組んでこられた。それらの膨大な学問のご業績は、いずれも時代の先端的課題に早くから着目された開拓者的なものであると同時に、基本原理に立ち返りつつ反省的分析を加えられる、真摯で明快なものである。そうした研究姿勢が学界でつとに高い評価を得ていることは、たとえば「英国カレントコスト会計制度化の検討」と題する論文によって昭和53年度の日本会計研究学会賞受賞の榮譽に浴されたことにも示されている。

先生のご研究は、現実経済のグローバル化の進展と国際的研究動向とをつねに視野に収めつつ、多方面からルートを拓いて前進し、複眼的視点と周到な準備の上に、着実に的確な判断によって独自の立場を築いてゆかれるように思われる。ご経歴に一端が示されているように、先生が学界で占められている枢要な地位と多彩なご活躍は、そうした堅実な学風のおのずからなる帰結にほかならないであろう。

先生は、成城大学における自由な学問の風土を深く愛され、誠実なお人柄を通じて教育者としてもきわめて大きな足跡を残された。ことに大学院教育においては、多年にわたり一対一の懇切の指導と督励によって、会計学を志す多数の俊秀に、進むべき途を不断に示され、また、学生による「会計学研究会」の精神的支柱でもあられた。わたくしは、厳しく真摯な研究者として日本の会計学界をリードしてこられた自明の巨大なご貢献によってだけでなく、学生の育成に向けられた先生のこうした面での地道なご功績のおかげも大いに受けて今日のわれわれの経済学部が存在しているという事実を、重く受け止め、大切に思いたいのである。

ご自身の生涯の仕事として会計学という実践的学問のフロンティアの開拓に打ち込んでこられた先生は、真剣に学問に生きる者のみがなしうる高い識見を、人間味豊かな暖かいお人柄に包みつつ、折に触れてさりげなく

## 序 文

お示しくださり、深い感動を覚えた経験はわたくしだけのものではないはずである。先生は、みずから求めて脚光を浴びることを決して好まれない。しかし先生の誠実なお人柄と手堅い手腕は、先生のご意思に反してしばしばご研究の妨げになられたかと察せられる。本学では、大学院経済学研究科長や経済研究所長として多大の貢献をされ、学外では、日本会計研究学会、国際会計研究学会などの枢要な会員として、また、大蔵省企業会計審議会など政府関係機関の委員として活躍してこられたのも、おのずから首肯される場所である。身体的ハンディを押して長年にわたってわれわれのためにご尽力くださったことを思い返すとき、いまあらためて襟を直し、深い感謝の気持ちを捧げたいと念じるのは学部の総意であろう。

先生は、一昨年春に本学を退任されたあと、ただちに城西国際大学に迎えられ、学問研究の大道を歩み続けておられる。折しも、わが学園では、新学部の創設を軸に大学全体の新生に向けた大改革が始まろうとしており、あわせて大学院教育のあり方も今後の重要な検討課題となりつつある。先生におかれては、今後ともいっそうご健勝のうえ、成城大学と経済学部の発展のために、変わらぬご指導とご助言をたまわることができればまことに幸いである。最後に先生のますますのご活躍と、ご家族の皆様とともにいっそうご多祥であられることを心から祈念申し上げたい。

平成 15 年 10 月

経済学部長・経済学会長

木 村 周 市 朗